



「フィールド映像術」  
分藤大翼・川瀬 慈・村尾静二 編  
古今書院, 2015年1月  
210頁, 2,800円(本体価格)  
ISBN 978-4-7722-7136-3

100万人のフィールドワーカーシリーズの第15巻として、「フィールド映像術」が刊行された。

映像には動画と静止画があり、研究のデータとしてだけでなく、学会や講義などで研究成果の発表に使われる。また、テレビ・新聞やインターネットなどにおいて、科学的事実を紹介する上でも、いまや欠かせないものになっている。

これまで研究者は、映像の技術と利用方法については、自ら試行錯誤しながら習得してきたことが多いと思う。気象においても、新しい撮影機器を積極的に研究などに取り入れ、フィールドにおいて活用している場面も多いだろう。

本書の目的は、そうしたフィールドにおける映像の活用法を紹介することを通じて、新たに拓かれつつあるフィールドワークの可能性と課題を提示し、共有することにあるという。

本の構成は、以下のようになっている。

- Part I 理論編—映像の学術的枠組み
- Part II 制作編—フィールドと映像のさまざまなかたち
- Part III 応用編—映像によるかかわりの創出
- Part IV 座談会

理論編では、映像についての歴史的、理論的な理解と、映像制作のプロセスについての構造的な理解が得られる論考が収録されている。思考は文字言語に依拠したものだけでなく、イメージによるものも重要であることから、学問の実践に映像を持ち込むことで、思考を多層的なあり方に向かって解放すると述べている。また、もともと映像は、学術的な課題に応えるものとして活用されてきたもので、研究対象の撮影のみならず、研究の現場を記録する学術史的な意味もある。

制作編では、4つの研究分野における映像術を具体的に紹介している。研究者自身の経験に基づいて、フィールドワークにおける映像の撮影・編集・公開の方法論や意義が検討されている。また、過酷なフィー

ルド環境における機材の選定や、得られた映像を「学術映像標本」として多くの研究者が活用する可能性にも言及している。そして、小型ビデオカメラを動物に付けた撮影、南極の湖での水中撮影、トマムの雲海のインターバル撮影などの具体例を、それぞれの著者が述べている。そこで、フィールド観測の基本は、「まず目で見て認識すること」という表現が印象的である。

応用編では、映像を活用することによって生まれるさまざまな繋がりや形が取り上げられている。論文や映画という形での学術成果の提示のほかに、社会に直接働きかけて、映像資料の価値を社会とともに再発見し、共有するというやり方もあるという。また、参加型映像制作が社会を変容させることもあるようだ。映像は時間と空間を越えて、人にイメージを運ぶことができるからである。

座談会では、研究分野を超えた「映像術」を共有しようとしている。研究者が映像を自由に扱えるようになったのは最近のことで、映像制作ワークショップも開催されている。そして、雪の映画（雪結晶の微速度撮影など）を発表した中谷宇吉郎博士について、科学映画の先駆者として語り、先人の知りたい、撮りたいというフィールドワーカーの魂を感じたという。映像の成果は、学会、シンポジウム、講演、論文のデータ、授業、メディアへの提供などの他にも、博物館の展示、小中学校、観光や大学の広報などにも生かされている。また、映像付きの学術論文もある。

気象に関する映像も、現象の確認だけでなく、教育現場などの学習効果も大きく、さまざまな場面で積極的に扱われるようになってきた。映像を見るだけでなく、児童生徒が実際に撮影して、科学現象を理解しようとする試みもある。撮影機器が年々進歩し、安価で使いやすくなってきて、誰でも映像が撮れるようになった時代だからこそ、映像の撮影目的と利用方法について、本書などで学ぶことが必要だろう。

本書は映像術についての本であるが、口絵のカラー8ページ以外は、文字の多いモノクロ印刷で、文章をじっくり読むようになっている。しかし、映像を効果的に使った事例などは、写真などを使って視覚的に表現できていれば、意図がもっと伝わったのではないかと思う。それにしても、このような指南書はこれまでなかったと思われる。フィールド撮影に関わる研究者には、頼りになる本であると思う。

(気象予報士・気象写真家 武田康男)